大項目	2	持続可能な社会の実現に向けた地球的課題と国際協力			
中項目	2-1	生活文化の多様性と国際理解			
小項目	2-1-1	文化・人種・民族と現代社会			
細項目 (発問)	2-2-2-1	文明、文化の概念と宗教はどのように関係するのでしょうか			
作成者名	杉本良男	作成・修正日	2017/2021/2023/2024	Ver.	1. 3
キーワード 5~10 個程度	文明、文化、宗教、野蛮、国家				

発問の意図と説明

１．宗教、文化、文明の概念とその関連性を学ぼう

1991 年のソヴィエト連邦崩壊とともに、第二次大戦後続いてきた「冷戦構造」、つまりアメリカ、ソ連二大国が二分する世界が終わりを告げました。ここで、資本主義・自由主義と社会主義・共産主義とのイデオロギー対立が終わり、資本主義・自由主義が勝利したとされました。しかし、新たな対立軸としてサミュエル・ハンティントン（ハンチントン）による「諸文明の衝突」がクローズアップされました。ハンティントンは宗教を重要な指標とする８つの諸文明をあげ、西方教会に拠る西欧文明に対して、とくにアジアの中華文明とイスラム文明とが対抗軸になると述べました。ハンティントンの議論は、その後の 9.11 アメリカ同時多発テロ（2001 年）とその後のイラク戦争（2003～11 年）などを予言したものとして注目されました。ここでは、近年ますます混迷する世界の情勢を理解するためにもっとも重要な「宗教」、「文化」、「文明」などの概念について相互に関連づけながら解説します。

２．文化と文明は似て非なる概念です

現在人類学、民族学では、「文化」を衣食住から始まって、生業活動や社会の仕組み、宗教や芸術など、およそ人びとの観念や行為とそこから生み出されたものすべてを指しています。つまり、人びとの生活のあり方そのものが文化です。ただ、文化には特定の民族、集団によって共有される、という外枠のしばりがあります。一方、「文明」は同じように人間が生きるための装置と制度を言いますが、そこには「進歩」と「普遍性」という文化にはない特徴があります。図１は、「文明」ときくと真っ先に思い浮かぶ「古代の 4 大文明」を示した地図です。

もともと「文化」と「文明」とは比較的新しい概念である上に、当初はほとんど同義に使われていました。それが分かれたのは 19 世紀のことでした。そこには、国民国家形成の先進国フランスと後進のドイツとの間の思想史上のズレがありました。

「文明」という言葉はフランス革命初期の指導者ミラボーが『人間の友、あるいは人口論』のなかではじめて使ったとされています。そこでは、「宗教は、異論の余地なく、人間性の第一の、そして最も有益な歯止めであり、文明の第一の原動力である。宗教はわれわれに教えを説き、絶えず友誼を思い起こさせ、われわれの心をやわらげ、われわれの精神を高め、われわれの想像力を刺戟し導く』と述べられていて、宗教との深いつながりが示されています。ここでの文明は、形容詞の、市民の、礼儀正しいや、動詞の、開化する、教化するなどの名詞形（civilization）です。ここには文明を構成する概念がほぼ含まれています。それは、道徳の強調、進歩、啓蒙の概念をともない、最終的な目標は国家、国民の文明化におかれています。

一方、「文化」はそれよりもはやくから使われていて、もとは「耕作」からきていて、育成、修養などの意味も持ちました。フランス、イギリスでは文化はむしろ忌避されましたが、これに対抗してドイツで広まっていきました。1793 年のドイツ語辞典では「個人または民族の全ての精神的、物質的諸力の改良や洗練。そのためにこの語は、啓蒙、つまり偏見からの解放による理解力の向上だけでなく、上品さ、すなわち習俗の改良や洗練も含む」となっていて、文明とほぼ同じように、開化、洗練、反野蛮などの意味が強調されています。このころは、文明、文化ともにその反対語は野蛮、未開でした。

その後、両者が袂を分かつのはフランス革命におけるナポレオンによるドイツ占領でした。そして、フランス語、英語において「文明」は、政治的、経済的、技術的、道徳的、社会的な諸事実に関わっているのに対し、ドイツ語の「文化」は、精神的、芸術的、宗教的な諸事実に関係し、政治的、経済的、社会的な事実とのあいだに強固な障壁をもうけているといわれます。さらには、国民国家形成において後発のドイツが、とくに「文化」

図と表のページ

図１　世界の４大文明

エジプト　メソポタミア　インダス　　黄河文明

http://old.harappa.com/indus2/oldworld.html　　より引用

の「文明」への優位性、つまり「精神文化」の「物質文明」への優位性を強調していました。ここに,「国民文明」をもったフランスと、「国民」が「文化」と一致しないドイツとの根本的な相違があります。

また、19 世紀後半のイギリスにおいては、植民地支配を通じて未開社会を支配し啓蒙するのは「文明化の使命」(civilizing mission)だと考えられていました。つまり,「イギリスこそがあらゆる面で世界の中心であり,そこからすべてのものが世界に向けて発信されるのだ」と考えたのでした。こうした「文明の遅れた国」を「文明化する手段については、自由貿易つまり通商の徹底が基本ですが、それだけでなく、科学技術の導入、教育制度の普及、法制度の導入、さらにキリスト教の普及などもあげられます。

３，大文字の宗教、複数の宗教の違いを理解しよう

「宗教」の一般的定義がきわめて困難であることは、およそ宗教の概説書に共通して言明されています。たとえば、社会学者のギデンスは、「宗教信仰と宗教組織が途方もなく多様性に富むため、宗教を広く受けいれられるかたちで定義づけるのに、研究者は非常に苦労してきた」と述べています。その一方でギデンスは、とくに西欧キリスト教世界の人びとにとって「宗教」はキリスト教と同一のものと認識されており、それが宗教概念そのもののモデルになっていることを否定していません〔ギデンス 一九九三、四四七ー八〕。

15 世紀末からの大航海時代以降、非キリスト教世界についての情報がもたらされ、さらに 19 世紀後半以降に人類学的知見などが普及することによって、一見「宗教」のような信仰体系にさまざまな形態があることが認識されました。そのため、キリスト教モデルの宗教理解によって、さまざまな形態を含む宗教の一般的な定義をもとめることはいちじるしく困難になりました。ここで宗教の概念について、キリスト教における宗教の単一性・普遍性と、一般宗教における多様性・個別性との二重性がうまれたことになります。比喩的に言えば、ここで単数形の大文字の（普遍主義的な）「宗教」と、複数形の小文字の（個別主義的な）「宗教」という２つの宗教認識が並び立つことになりました。

カトリックはもともと普遍性を意味する言葉でしたが、宗教改革以後あらわれたプロテスタンティズムは、国家体制やナショナリズムとも親和的でした。というよりも、カトリックが支配する普遍志向の世界に対する、興隆し始めた国家という制度の挑戦をプロテスタントが支えたと言えるのです。マルティン・ルターの挑戦は、既成の宗教制度に対する批判であるとともに、ラテン語が支配する普遍的世界に対するドイツ語によるナショナリズムのあらわれでした。カトリシズムは現世も来世もふくめた全体的な世界観を人びとに与える体系でしたが、プロテスタンティズムは、宗教を超自然的で個人的な領域に限定することになりました。

宗教は、本来文化や文明に全体的、総合的な世界観、宇宙観を提供する知識の体系でした。それは現代社会で一般に言われるような迷信や神秘ではなかったのです。ただ、19 世紀後半に科学主義が世界を支配するようになったとき、現実世界、自然世界は科学が扱い、宗教は超越的世界、超自然世界に押し込められました。それによって、宗教の領域は合理的には理解できない不可知の領域に追いやられていったのです。

ナショナリズムと結びついたキリスト教、それもプロテスタンティズムをモデルにした複数形の「宗教」概念は、19 世紀以降、西欧世界以外のさまざまな信仰体系にも適用されました。1801 年には仏教（Boudhism）が、1816 年にはヒンドゥー教（Hindooism、Hinduism）が出現し、さらに道教（Taouism、Taoism、1839 年)、ゾロアスター教（Zoroasterianism、 Zoroastrianism、1854 年)、儒教（Confucuanism、 Confucianism、1862 年)などの概念がつぎつぎとあらわれました。どれにも「イズム」がついていて、キリスト教（Christianity）やイスラーム（Islam）などとは異なっていることに気づきます。このように、近代世界の出現を演出したプロテスタンティズムは、非キリスト教圏の信仰体系を改革することにも適していたことになります。

1893 年にアメリカのシカゴで、コロンブスのアメリカ大陸到達から 400 年を記念して万博が開催されましたが、その企画の一つとして万国（世界）宗教会議が開催され、各宗教、信仰を代表する宗教者が一堂に会しました。これによって、キリスト教だけではない「宗教」の複数性がひろく認識されるようになりました。それだけでなく、このような認識がアジア各地の植民地エリート指導者などに受け入れられて、みずからの「宗教」をキリスト教モデルに合うように改革していくことになりました。それは、アジアのナショナリズムにおいて、当時物質的には西欧に負けているが、古代には精神的に優位にあったとする考え方によって、改革された宗教が植民地のプライドを回復するため核にすえられたからでした。極論すれば、いま行われているさまざまな宗教は、言ってみれば西欧からの視線と非キリスト教世界のエリートとの合作によってできたものだといえます。

図と表のページ

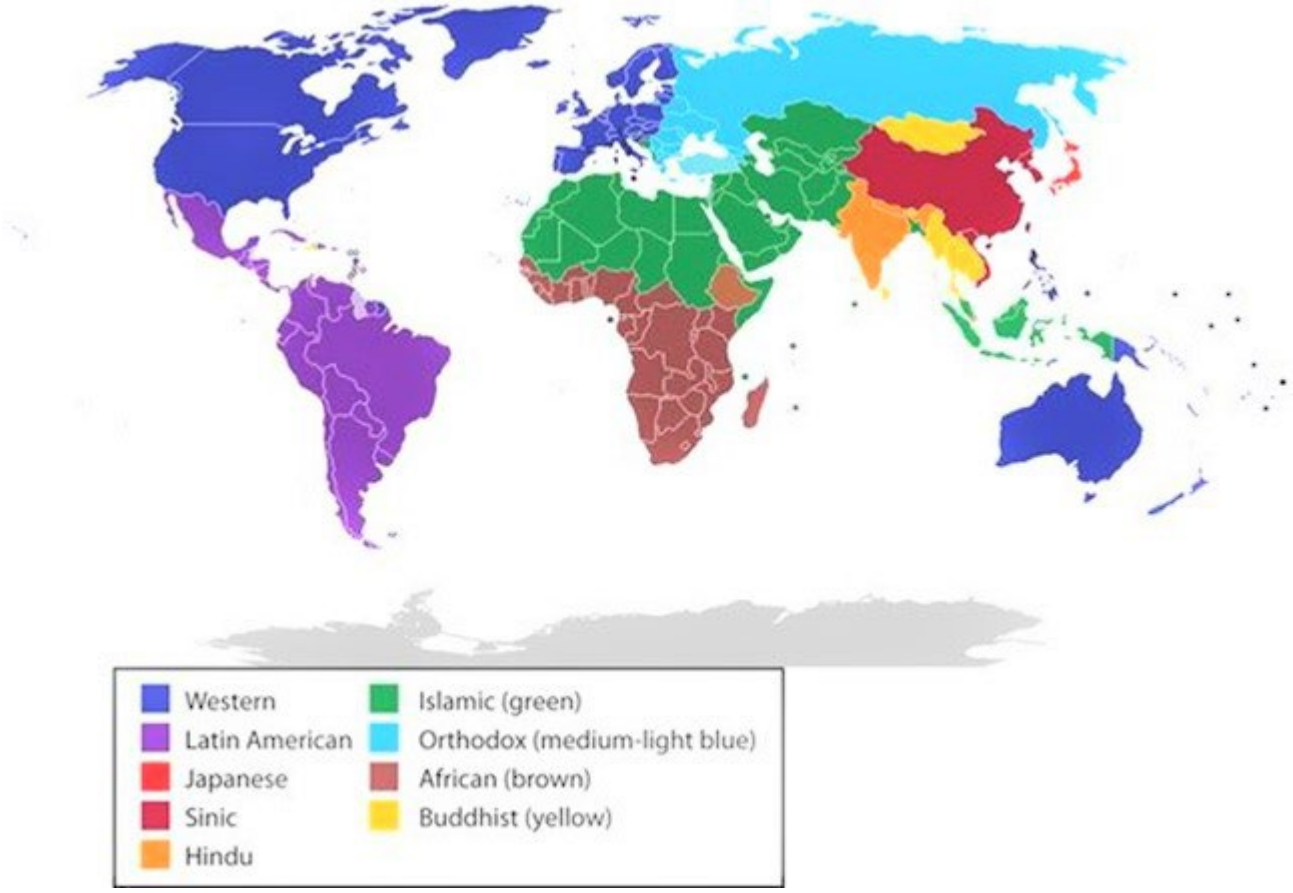

図２．宗教・民族から見える文明地図
https://ar.pinterest.com/pin/324962929336574592/より引用

４．文明の衝突が支配するグローバル化の時代のジレンマを理解しよう

ノーベル経済学賞をうけたインドの経済学者アマルティア・センは，自らの体験に照らして，単眼的な帰属意識が起こすアイデンティティ意識の暴力性を指摘しています。そして、個別の文化を実体化した上での多文化主義や共同体主義を鋭く批判して，個人や集団のアイデンティティの選択を出発点とする多様性，多元性に向けての提言を行っています。センは，冷戦後の世界において，ますます激しさを増すアイデンティティと暴力について強い危機感を持って警鐘を鳴らしています。

センはとくにハンティントンによる宗教を規準にした「文明の衝突」論には大いに批判的です。人びとを特定の宗教、文明という抽象的な枠組みの中に閉じ込めようとすることは危険だというのです。センに限らず、ハンティントンの議論の粗雑さについては多くの批判が浴びせられました。しかし、現実世界はその見通しのように進んでいるように見えます。2001 年のアメリカ同時多発テロは、西欧キリスト教文明（アメリカ）に対するイスラム文明の挑戦だととらえられました。当時のブッシュ・アメリカ大統領は、「悪の枢軸」というキリスト教的な言い回しをつかって人びとの十字軍的な敵愾心やヒロイズムをあおりました。最近のアフガン戦争の終結とタリバーンの復権もまた同じような構図であり、さらには米中経済摩擦は中華文明から西欧文明のはげしい挑戦だとみられるからです。

宗教は、国家とともに社会を大きく統合するための、大きな物語を提供する制度です。それだけでなく、とくに近代の宗教は、社会・政治よりも個々人の内面により深く関わる制度にもなりました。宗教は人びとの精神性・内面性を支配する最強の原理となったわけです。こうして、人びとは自らの生存の根本を宗教に深く委ねることになりました。それにより、自らの存在を脅かす外部の力にたいしては、生存を賭けた闘いをいどむ結果にもなるわけです。現在各地を起っている宗教民族紛争は、近代国家体制の中で民族としてのアイデンティティ意識が分断されたり脅かされたりしたときの生存をかけた闘いであるために、残忍な暴力も厭わないようになったのです。ここに近代国民国家がかかえる最大のジレンマがあるといえるでしょう。

参考 URL(2024 年３月参照確認)

参考 url1　　インダス文明など古代文明研究者による写真,動画、資料，史料公開サイト
http://old.harappa.com/indus2/oldworld.html

参考文献

アマルティア・セン『アイデンティティと暴力―運命は幻想である』(大門毅編集、東郷えりか訳) 勁草書房、2011
サミュエル・ハンチントン『文明の衝突』(鈴木主税訳) 集英社、1998
西川長夫『増補　国境の越え方―比較文化論序説』平凡社、2001
西川長夫『地球時代の民族＝文化理論―脱「国民文化」のために』新曜社、1995
国立民族学博物館編『世界民族百科事典』丸善出版、2014